http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１５７６号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

国　語　第112号

－中学校，高等学校，特別支援学校対象－

平成２０年５月発行

中高の系統性を踏まえたPISA型読解力の指導の工夫

－PISA型読解力の三つの問題の観点を踏まえた指導法の工夫－

平成19年４月に実施された全国学力・学習状況調査の国語Ｂ（主として「活用」に関する問題）は，問題作成の基本理念を次のように整理し，その力を評価しようとしている。

○　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
○　様々な課題解決のための構想を立て実践し評価改善する力

前者の「実生活に活用する力」や後者の「課題解決のために評価改善する力」は，PISA型読解力の定義「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力」と共通性が深いことが認められる。また国語Ｂの問題の中には，「文学作品を評価しながら読んで，作品の内容や構成，表現上の特色を踏まえ，自分の考えを書くこと」と，その出題の趣旨が述べられたものもある。これもPISA調査の「書かれた情報を自らの知識や経験に位置付ける力」つまり「熟考・評価」の観点が踏まえられていることが確認できる。このように，今後，「読むこと」の学習におけるPISA型読解力の育成を国語科における大きな課題として，その基本的な考え方を踏まえた具体的な指導法を検討し，構築していかなければならない。

そこで，本稿では，PISA型読解力の基本的な考え方や具体的な実践例，指導のポイントについて述べていくことにする。

１　PISA型読解力について

(1)　問題の観点について

PISA型読解力は，知識や技能等を実生活の様々な場面に活用する力が試されており，以下の例に示すように問題の観点が三つ設定されている。

ア「情報の取り出し」　2000PISA公開問題
例　課題文の一部に「良いスポーツシューズとは，次の四つの基準を満たしていなければなりません」と書いてあります。これらの基準を記してください。

「情報の取り出し」とは，読解のプロセスとして，テキストの中の事実を切り取り，言語化したり，図式化したりするものである。上の例では，それぞれの基準を直接引用したり，言い換えたり，または詳細に説明することが問われている。

イ「解釈」　2000PISA公開問題
例　落書きを擁護しているソフィアの手紙の内容を読んで，ソフィアが広告を引き合いに出している理由は何かを考えなさい。

「解釈」とは，テキストに書かれた情報を比較・推論して意味を理解するものである。上の例では，落書きと広告を比較している文章の構造をとらえ，広告を

引き合いに出すことが落書きを擁護する手段となっていることを推論する力が問われている。

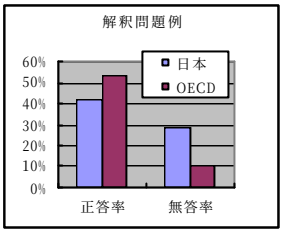
ウ「熟考・評価」　　2000PISA公開問題
例　物語「贈り物」の最後の文が，このような文で終わるのは適切だと思いますか。最後の文が物語の内容とどのように関連しているかを示して，説明してください。

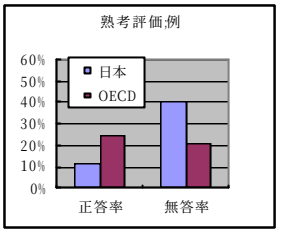
「熟考・評価」は，書かれた情報を自らの知識や経験と結び付けて自分独自の評価や判断を行うものである。上の例では，物語を正確に理解した上で，その奥に示された意味を解釈したり，主題で示された観点から物語の結末を評価したりする力が問われている。

(2) 課題

例示した「情報の取り出し」問題の正答率は，73.4（75.9）%，無答率は8.5（5.1）%と（　）内に示したOECD平均とほぼ同程度の結果であった。一方，「解釈」や「熟考・評価」問題については，表１に示すようにOECD平均との差が顕著に表れている。

表1　「解釈」，「熟考・評価」の正答・無答率





また，無答率がOECD平均より５%以上高い問題の出題形式は自由記述（論述）に集中していることも判明している。このように，わが国の子ども（義務教育修了段階の１５歳）は，「テキストの解釈」や「熟考・評価」とりわけ「自由記述」の問題を苦手としている。PISA型読解力の課題が単に「読む力」にとどまらず，「考え」そして「書く力」と連動していることに留意しながら指導を展開していく必要がある。

2　PISA型読解力育成の実践事例

PISA型読解力を育成する具体的な取り組みは，文部科学省が既に示している「読解力に関する指導資料」等が参考となる。ここでは，中学校と高等学校における説明的な文章教材を取り上げ，発達段階に応じた「情報の取り出し」，「解釈」，「熟考・評価」のそれぞれの具体的な学習指導の進め方を発問事例を通じて述べる。

(1)　「情報の取り出し」の発問例

教 材 名	発 問 例	生徒の解答例	学習指導要領との関連
中学校 説明的文章 「松と杉」 安藤邦廣	松林が農村の生活の基盤であったとあるが，その事例を確認しなさい。	①　地下水や腐葉土を確保する役割。 ②　薪などの燃料資源や農家建築の建材を供給する役割。	構成・展開の把握（事実と意見の読み分け）
高等学校 評論文 「ミロのビーナス」 清岡卓也	ミロのビーナスが呈示する不思議なアイロニーとは何か。	世界との交渉手段である両腕を無くし，人間存在における象徴的意味を失ってしまった。しかし，逆にそのことによって無限の夢を奏でることができるようになったということ。	内容把握や要約（叙述に即して的確に読み取り，必要に応じて要約）

「情報の取り出し」は，国語の授業の中で最もよく行われる発問である。内容の正確な理

解を求めるものであり，教材の叙述を根拠とすることが基本である。生徒の理解する力に応じて，以下のようなポイントを踏まえて発問したい。

初期的な段階においては，読書指導におけるアニマシオンのように一問一答の形で，一つの情報を的確に拾い上げさせることから始める。次の段階としては，ある程度テキストの範囲を広くして，取り出させる情報を複数項目に増やしていく。中学校の「松と杉」の発問例のように，松が農村の生活基盤となって果たしていた役割は，「水や肥料の確保，燃料と建材の供給」など，多岐にわたっていることを的確にとらえさせる発問を行うとよい。

さらに高等学校の段階では，筆者の論点を対立的な論点との比較の上でとらえさせることがポイントとなる。教材「ミロのビーナス」の発問例のように，「失ったことによって，逆に可能になったこと」を確認させるという形で，論理的に相反することを本文の叙述に即して的確に読み取らせる発問を工夫したい。その他，原因と結果の因果関係をとらえさせたり，推移したことがらの前後の変化をとらえさせたりするなど，教材の内容や生徒の発達段階に応じて，より良く工夫することが求められる。

(2)　「解釈」の発問例

教 材 名	発 問 例	生徒の解答例	学習指導要領との関連
中学校 説明的教材 「松と杉」	筆者はどのような意図で，前半に松を後半に杉を論じていったのか。	両者の共通点として，人々から利用されなくなったことによって新たな環境問題（松枯れや生態系の変化など）が生じていることを強調するため。	構成や展開の把握（書き手の論理の展開を理解する）
高等学校 評論文教材 「ミロのビーナス」	筆者は「具体的な二本の腕の復活」を恐れるとのべているが，それはなぜか。	①　復元されたビーナスは限定された特殊なものとなり， ②　「生命の多様な可能性の夢」「存在すべき無数の腕への暗示」が失われてしまうから。	内容の把握や要約（叙述に即して的確に読み取り，必要に応じて要約）

「解釈」は，単にテキストを読むだけでなく，テキストの内容や筆者の意図（構造・形式や表現法）などについて考えを深めさせることが求められる。よって，発問は「なぜ」，「どのように」という冠詞がつくことになる。中学校の「松と杉」の例では，筆者の表現の意図を考察させるものを例示した。このような問いを明らかにするには，テキスト全体の論理的構造がどのように組み立てられているかを理解する必要がある。この発問は「書き手の個性的な説明の工夫や説得の方法」をとらえる力を育成するという意味で，学習指導要領とも関連の深い学習活動となっている。また，高等学校の「ミロのビーナス」の例では，本文に述べられたことがらの原因や理由を考察するものとした。解答例に示すように，失われた２本の腕が復活することにより，ビーナスの姿がどのように変化していったのかを，本文に書かれたことがらを根拠にして，的確に表現することを求めていくようにする。

「解釈」の発問において留意したいことは，（「松」と「杉」，「失われた姿」と「復元された姿」）のように，教材に書かれた二つの情報を比較することによって推論し，そこで考えたことを表現するように導いていくことである。

(3)　「熟考・評価」の発問例

教 材 名	発 問 例	生徒の解答例	学習指導要領との関連
中学校 説明的教材 「松と杉」	美しい松林を取り戻し，杉山などの森林を保全するには，あなたはどのようなことを行っていくべきだと考えますか。	①　利用の仕方を考え，需要を拡大していくこと。 ②　生産性の視点だけでなく，環境を保全する役割にも着目し，その存在を評価する。	ものの見方・考え方（文章を読んで人間・社会・自然などについて自分の意見を持つ）
高等学校 評論文教材 「ミロのビーナス」	人間の手の持つ表現力について，あなたの考えることを具体的事例を示しながら論述しなさい。	①　手は自己と他者との関係性を結ぶもの（自己の意見）。 ②　自分の思いを他者へ伝える手の表現の具体例を案出。 ③　人間における手の意義を述べる（結び）。	ものの見方・考え方（様々な文章を読んでものの見方・考え方を広げ深める）

「熟考・評価」においては，テキストの内容や構成，表現上の特色を根拠に，それらを自分の知識や体験と結び付けて，自分独自の評価や批判を行うことが求められる。しかし，テキストについて「評価・批判（クリティカル・リーディング）を行う」ことは，従来の国語教育では指導や発問の頻度が少なく，生徒たちが不得手としている。

初期的な段階においては，賛成，反対のいずれかの立場に立たせ，その考えの根拠をテキストの中に求めさせる。意見と理由をきちんとつなぐことが要件である。次の段階では，中学校の「松と杉」のように課題解決型の発問にして，自分の考えを表現する力を養っていく。主観や憶測といった不確かな根拠ではなく，ふだんから授業中に根拠をテキストの中に求めるよう指導することが大切である。生徒の考えの根拠として解答例①②に示したものは，いずれもテキストの中に明記された内容となっている。さらに高等学校の段階では，「ミロのビーナス」の発問例のように，テーマに対する自分の考えを具体的事例を示しながら説明するという小論文型の発問を設定する。テキスト内部の情報にとどまらず，それ以外の知識や経験（テキスト情報と同列または延長線上にあるもの）を引き出し，考えることを求めていく。単に何が書いてあるかを読み取るだけでは対応できない設定にすることにより，論理的に思考し表現する力を養っていく。

3　PISA型読解力の評価について

PISA型読解力を育成する読むことの学習指導において，生徒が自分の解釈や意見を表現する授業を展開する際，生徒の答えをどのように評価するかが問題となる。国研の有元秀文氏は評価基準の骨格を表２のようにまとめている。基本的には質問と意見と根拠の関係が論理的につながっていることが求められる。意見とテキストの中の根拠とのつながりについては，普段の授業から，「根拠としてそれで正しいのか」や「どうしてそう言えるのか」など相互批判するトレーニングを積み重ねていくことによって，PISA型読解力を着実に身に付けさせていきたい。　（教科教育研修課）

表２　PISA型自由記述問題の評価基準の骨格

①正答	質問にきちんと答えている。
誤答	質問と関係のないことを書いている
②正答	明確に自分の意見を述べている。
誤答	文章の抜き書きや書き写しをしている。
③正答	意見の根拠がテキストの中にある。
誤答	根拠の不確かな主観や憶測で意見を述べる。
④正答	根拠と意見が論理的につながっている。
誤答	意見と関係のない根拠をあげている。